



平成17年度全国高等学校総合体育大会 平成17年8月1～5日
インターハイ 石川選手 18期生 2005



野田市バドミントン協会 役員新年会 2007

コラム4 よさこい高知国体を終えて (T&B 26号より)

よさこい高知国体は、その誘致決定時から話題となった国体である。橋本知事の「国体の見直し」は、これからバトンがまわってくる私たちにとって、格好の学習の場になった。今年の国体選手選考は6月に四街道市で行われた。選考そのものは、佐藤、小池に誰が加わるかが主題であった。1複2単の編成では、同格のシングルスか、もしくは、ダブルスの専門家が必要になってくる。シングルスは序列が付き、3番手を加えても出場することは無い、一方、竜口選手はシングルスこそ並の選手であるが、小池選手とのダブルスは非凡なものがうかがえる。正式に決まったのは夏場であったが、佐藤真由・小池温子・竜口千秋の3名で長い旅は始まった。

最初から国体に照準は合わせていた。いかにピーキングを十月下旬にもってくるかが課題であった。インターハイが新人戦、全日本ジュニアが力試し、そして国体を本番に据えた。8月は特別練習を早朝6時30分から、佐藤、小池と打った。全日本ジュニアの前には戦術を変え、守りから攻撃に移行しようとした。些細なシャトルも上げないで落とし込む。しかし、巧くいかない。練習を見に来た校長先生にも、「ミスが多いね」と見抜かれた。私も機嫌が悪くなり、嫌みを言うようになる。そんなある日、ミスの多いストロークを取り出して、ひとり1,000本のノックを行った。二人で2,000本。夜が更けた体育館にシャトルを打つ音が響いた。小池が過呼吸になって倒れたこともあった。佐藤が勉強との狭間に苦しんだ時もあった。しかし、幸いに元気で明るい(時に明るすぎる)竜口がいて、やさしい平戸がいる。さらにお人好しの大津、山下、西田の男子三人組。同期のみんなが励ましてくれ、つきあってくれた。

全日本ジュニアの最終調整を羽関監督(旧姓、謝さん)の広島ガスで行った。そこは、小池が強く希望している実業団のチームでもある。「だいじょうぶだよ」謝さんはいつも楽観的だ。しかし、小池の入団を考えると、さすがの監督もこと細かく注意する。「相手を見るんだ」「沈み込みが少ない!」、1試合が普通の何倍にも感じられるような密度の濃い練習ができた。その夜、謝さん、高橋部長さんと杯を重ねながら、夢を語った。

大阪の全日本ジュニアでは、県立岐阜商業のペアと再戦する。インターハイでは0対2の一方的な敗北。スピードとテクニックで完全に負けていた。しかし、今回は違った。1ゲーム目は負けたものの、2ゲーム目の中盤から、粘りと巧みな配球でミスを誘った。逆転でファイナルゲームにもつれ、12対12まで競ったが、キャリアの差でもっていかれた。しかし、前進、成長はしている。個人でのベスト8もうれしいが、内容の良さに満足した。ちなみに男子の西田・岡田もベスト16まで入り、善戦、同級生全員の

応援も良かった。高知に入る前は、縁あって、世界のヨネックス、梶野尾さんに巡り会い、米倉、山本らの豪華メンバーと練習をさせていただいた。これもまた、細かなアドバイスに良い勉強になった。このヨネックスチームは千葉県成年女子チーム(昨年度優勝)でもあり、国体の終始にわりとお世話になった。

羽田空港から高知県に入った。南国市とはいうものの、すっかり秋らしい風景に、見知らぬ土地と言うこともあり寂しさを感じた。下陸内地区公民館には空港からタクシーで数分で行くことができる。畑や田圃の間に緩やかなカーブをえがく細い農道沿いに、小さな会館があった。驚いた。地元の方々が立って、並んで到着を歓迎してくれる。ふと見ると、私を含みみんなの名前が書かれた歓迎のぼりと「千葉県がんばれ!」の旗が掲げている。早速、近くの宿泊先、小松さん方に案内された。また驚いた。玄関先の生け垣に、大きな文字で「がんばれ 西武台千葉高校」と書かれている。誰が作ったのだろうか? そういえば、出発数日前に、「うちにはハムスターがいます」というかわいいはがきを受け取ったが、このお宅にはお嬢さんが2人いるのだ、と気がついた。小松さんのおばあさん、おじいさんに迎えられ、私と3人の選手にそれぞれ別棟の部屋を用意してくださった。小松さんのお宅はやさしい方々で、いろいろと細かな気を遣ってくれていることが分かった。

食事は公民館でいただいた。初日の晩は、千葉県成年男子チームとともに、地元の子どもからお年寄りまで、大勢の方々の歓迎を受けた。会場の壁には、「歓迎 千葉県…」の旗、それぞれの名前が書かれ、歓迎会の式次第も貼られて司会の方の上手な進行で会が進み、かわいい子どもたちによる「よさこいソーラン節」の踊りも披露していただいた。その後はにぎやかな宴になった。「土佐の人は酒を水のように飲む」とのアドバイスを受けてはいたが、楽しい会にそんなことはすっかり忘れていた。まるで祝勝会のムードだった。大会は、南国市スポーツセンターで行われる。コスモスがこの日を待つように咲き、体育館を広く囲んでいた。開会式は、地元の人がいっぱいになる、と主催者側から聞かされていたが、バドミントン競技、それも開会式だけに人々は動員されるのも大変だなあ、と考えていたが、式後の1回戦の応援団が陣取っていたのだ。民泊地の皆さんが各都道府県の応援団を結成していた。ハッピー、ハチマキ、のぼり、旗、看板そして声を出してのエール、コール、さらに鳴り物の登場!今までの経験で無いことなので戸惑っていたが、それに注意をする野暮な審判もいなかった。これでいい、と思った。

心が浮かれてはいけない。特に女の子だから引き締めも難しい。そう思うととたんに肩に力が入り、選手にもきつくあたる。グラウンドでの走り込みに加えて、練習会場では、説教までとびだした。対戦前の練習会場は、そんな張りつめた空気が漂っていたのも事実であった。我が国でも有名なプレーヤーや監督がいる。背伸びをしている僕らもいた。

そんな時、あのかわいらしい2人が来た。民泊先である小松さんの美有紀ちゃんや聡美ちゃんのお譲さんたちが、お父さんとお母さんに連れられやってくるのだ。お姉さんの美有紀ちゃんは、地元でもナンバーワンの名門校に通う秀才。しかもバドミントン部に入っている。前日の晩、小松家で竜口選手の十八歳の記念すべき誕生会を、わざわざケーキまで用意していただき、十八本のローソクを立てて、盛大に開いていただいた。にぎやかに楽しい声が響いていた。「明日、一緒にバドミントンやろうよ!」しつこく誘った。2人はその言葉通り練習に来たのである。隣では高橋トブクラスの熊本八代東高校、逆サイドではNEC九州が……。緊迫した会場内に、ひとときわアットホームなコートができあがった。しかし、今にして思えば一番真剣にやっていた選手は、美有紀ちゃんだっただろう。お疲れさまでした。

1回戦はシードだった。相手は山口県と福島県の勝者である。さすがに国体の時期まで来ると簡単なミスは減り、ゲームは長引いている。結局、相手は福島県になった。この試合には最も元気な(コートの外では)竜口を小池と組ませて出場する予定であった。2人の攻撃力は並以上であるが、守備力はそれ以下である。従って、気弱になったらいけないと朝から檄を飛ばした。スタンドでは市民運動会でライバルの地区が福島を応援し、下陸内地区のみなさんと大声の応援合戦が繰り広げられている。ダブルスをとり、シングルスへ。佐藤がコートに立つ。日頃はかわいらしい笑顔の似合う女の子だが、そこでは違う。追いつめる、しかし、相手も決まったと思うショットをつないでくる。そこでさらに押さえ込む。2対0で勝った。

次の相手は大阪府。大阪には1年生ながら今年のインターハイでシングルス3位の選手がいる。その選手が単複を兼ねると予想していたオーダーはズバリ、ダブルスと第2シングルスに出てくる。当然、ダブルスを取り、第1シングルスで勝負を決めたかった。ダブルスは佐藤・小池が順調に点を重ね2対0で決めた。第

1シングルスは小池、第2シングルスは佐藤である。佐藤まではまわしたくない…。小池がコートに立った。相手はまだ2年生の選手で粘りのあるクリアとミスを誘う配球のできる上手な選手だ。小池はそのワナにはまったように、クリアに対して無計画なスマッシュを打ち、ネットにつめられ、一見チャンスをつかんでいるようだが点が取れない。1ゲーム目、9点でまさかの逆転負け。「あーや、これまでか…。」と気を落としている。その頭上では大阪応援団と下陸内のみなさんの応援バトルが繰り返されている。「まだや、あきらめたらアカン！」と頭の中にもう一度力を込め、小池と話す。わずか九十秒に話せる内容は限られている、ありきたりだが「ワナにかかるな！」「だけど守るな！」と強く言った。不思議と小池は全く自信を失った様子はなく、むしろ「これからでっせ、まあ、見とき！」のような表情をのぞかせる。コートサイドで振り向き、険しい顔でベンチに戻るそのとき、観客席最前列に見覚えのあるダンナさん方が、身をのりだして、下にいる私たちに何か言っている。「カントク！今何言ったん！？アドバイス何？」。この一言で全ての色が変わった。こんな気の利いた応援をいただいたことはない。まさに私たちの活力剤になっていった。2ゲーム目、3ゲーム目と小池はペースと戦術を早めていった。いつもの小池「グリコポーズ」を繰り返し、相手がうなだれ始めた。やっとベスト8に入った。

気になっているのが隣のコート、次の対戦相手である。私たちは戦前、きつと大分が出てきて高知とあたると読んでいたが、その大分が栃木に敗れ、その栃木が高知と大接戦を繰り広げている。ダブルスは長い試合を高知がとり、第1シングルスもさらに長い長い試合を栃木が勝ち、スタンドは地元高知県だけに盛り上がるだけ盛り上がった。すると、高知の第2シングルスの選手がその異様な雰囲気の中、コートの中に入らず泣き出した。監督がタオルで顔を押しさえるようになだめる。会場の視線はすべてそこに集中している。彼女は、その声援に身体いっぱい力を振り絞ってこたえた。高知県に二十五年ぶりの快挙をもたらしたのだ。翌日の高知新聞は、その時の模様をこう書いていた。

『勝負を決する第2シングルス。今橋（清和高）はコートに立つ前から、もう泣いていた。「プレッシャーに耐えられない。やりたくない」。弱気の虫が顔をのぞかせる。そんな今橋を後押ししたのは、耳をつんざく会場の大声援だった。「みんなが応援してくれる。負けてもいい。最後まであきらめずに戦おう」。気持ちを奮い立たせると、強気の攻めで先手先手。第1セットを奪う。だが、足元がふらふら。第2セットを取り返した栃木の選手はそんな今橋を見て、「勝てる」と思ったという。後のない第3セット。1プレーごとに声援は高まる。もう悲鳴だ。（中略）声援に後押しされ、よろめきながら、倒れながらのレシーブ。ついにマッチポイントを握る。スマッシュを相手がネットに掛けた瞬間、今橋は両ひざをついてコートに泣き伏せた。3時間を超える熱戦。（中略）橋詰高博コーチは4月に仕事を辞めて、3人の強化に専念。成年代表選手も、自分たちの強化をそっこのけで練習の相手を務めてくれた。「自分たちの力だけでは勝てなかった」と今橋。みんなであつくだ8強だった。』

（高知新聞 10月29日付）

そして我々も千葉県三十年ぶりのベスト4入賞をかけ高知とぶつかった。

お互い前日遅くの試合で疲労が見られたが、どちらも二十五年、そして三十年ぶりのプライドと努力の結晶を競い合った。ダブルス、シングルスに佐藤と小池を再び連続投入した。一ヶ月前の全日本ジュニアで同じダブルスと対戦していたため、試合は進めやすかった。続く佐藤のシングルスも1ゲーム目までは順調だったが、2ゲーム目、自分をすべてぶつけてくる高知の選手に圧倒される。あわやと思うところを逃げ切った。かろうじて勝てた。まるで山登りのように、使える体力と気力の限界への挑戦である。アリーナからロビーに出ると、千葉県関係の方々次々に喜び、祝福してくれる。だが、次の相手、岐阜県こそインターハイ、全日本ジュニアと登り詰めている、まさに最大の難所、そそりたつ断崖である。

インターハイ優勝ペアの攻撃力は超高校級であった。特にエース脇田選手の攻撃は読めない、とれない……。そこで、1ゲーム目からとばして先手を握った。ただし先手を握っているだけでは勝てない。ラリーが切れない、簡単なミスもしない、できない、許されない。緊張したゲームはファイナルゲームまでもつれる。インハイは0対2であっさり負け、全日本ジュニアではかろうじて1ゲームをとった、この国体でと思ったが、最後の手が頂上に触るが力が入らない、力が尽きた。残念無念、まるでそこから下に真っ逆様に落ちるがごとく、続く佐藤のシングルスも全く力が出ずに終わった。精も根も尽きた。みんなが、泣き出す彼女らの心の襷を一枚一枚優しくのばしてくれる。作り笑いでごまかすのが精一杯の自分が情けなかった。

その晩、下陸内の皆さんはお祝いをしてくださった。見たことのない豪華な料理（血鉢サワチ料理）、なんと言っても纏のたたき、何もかもがよかった。もっと良かったことは、皆さんが笑顔で接してくださったことだ。「カントク！飲んだら？」「俺！口だけやなっ！」「ワッ、ハッハ！」生まれて初めてのサインも経験した。私は、エプロンへのサインに千葉県の地図を描き、野田市を示した。

翌最終日、3位決定戦は宮城県と対戦した。試合前の3分間はウォーミングアップのため私を含む4人で該当コートでの公開練習になる。特に小池・佐藤とは、冬の寒い夜も、夏の暑い朝も、彼女らの成長とともに羽を打ち合った。2人とも卒業を境にバラバラになる。こうしてひとつの羽を3人で打ち合うのもこれが最後だと思うと急に寂しさがこみ上げてきた。そんな元気の無さが選手に乗り移り無様な負けをきしてしまった。スタンドの皆様には顔を合わせることでできないほどの恥ずかしさもあった。ロビーに出ると小池も佐藤も竜口も泣いていた。しかし、下陸内の皆さんは、彼女らの手を握り「ええもん見せてもらいました！」と励ましてくれる。同時進行の成年女子（ヨネックスチーム）は2年連続優勝をおさめた。成年、そして私たち少年女子の点数を合計すると女子総合優勝、「皇后杯初優勝」だったようだ。

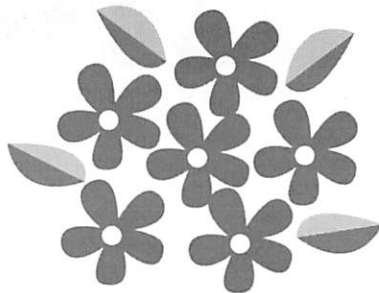
ガラんとした2階の控室には、我々4人しかいなかった。高校生活最後の大きな大会を終えた彼女らに言いたいことは山ほどあった。進路のこと、将来のこと、そして昔の懐かしい話……。だけど、厳しい言葉を残そうと思った。学校に残した大勢の選手のことを思うと、自分たちだけこんなに幸せになっていいのかと心を絞った。4人とも立ったまま話しているうちに涙がこみ上げてきた。恥ずかしいので視線を横にそらす。窓から見えるコスモス畑、見下ろすと体育館の駐車場。ふと、そこで車を誘導している男性に目がいった。ドキッとした。つい先ほどまで観客席で大声援を送って下さり、「良かったよ！」と手を握ってくれたあの下陸内の方が、南国とはいえこの冬初めての北風の中、丁寧に車を誘導する駐車場のボランティアをしている。「おい、見ろ。あれこそを忘れてはいけないゾ。あんな方々がいるから私たちはいるんだ。」思い出せば、同期の平戸亜里沙をはじめコートを譲ってくれたチームメイト、慕って近づきかわいいわい先輩たち、陰ながら強く支えてくれた家族、お人好しの同期の男子3人……。つまり私たちがだけではできない喜びを、皆さんの代表で味わわせていただいたことになる。「かけた情けは水に流せ、受けた恩は石に刻め」。

夕刻、慌ただしく空港に向かった。ロビーで名残惜しく待つところに、北村さんや小松さんが見送りに来て下さった。その北村さんを見て、ちょうど同年齢の両親を思いだし、そこからあわてて土産を送った。「高知はいいところだよ」と書いたはがきも添えた。

千葉に帰ると、稲田先生はじめみんな喜んで迎えてくれた。数日後、千葉市幕張の立派なホテルで、成年女子のV2、そして女子総合優勝の祝賀会を盛大に催していただいた。平日にもかかわらず、大勢の方々から祝福を受け、恐縮するばかりであった。

平成17年に全国高校総体（インターハイ）が、そして平成22年にはこの国体が私たちの街にやってくる。国体は様々な顔をもつ。いつしか、勝利と膨大な支出のゆがんだ大きな顔になってきた。その顔が、土佐の人々の熱い思いと心意気で、キリッとした勝負の厳しさと、温もりのある笑顔にかわった。この顔を大切にほころばせ、もっと大きな笑顔にしたいものだ。私たち人間の、人間としての生きる価値はこんな所に垣間見られる。

冬本番をむかえた早朝のグラウンドに、後輩たちが白い息を吐きながらせつせと駆け抜けていく。先輩に追いつきたい、新しい世界を見たい。若き選手たちは夢を描きながら走る、そして羽を追う。見えないバトンは次の世代に確かに渡っていったのを感じ取った。



コラム5 第17回信州合宿 (2003.8 T & B号外より)

17回目を無事終えた信州合宿を終えた後に私が地元の信濃毎日新聞(8月7日)に投稿したものです。

◇ ◇
私の妻は長野県出身で、私としても信州とまるごと結婚したような気分です。千葉に移り住んで私たちは、ジュニアのスポーツ(バドミントン競技)指導に精を出しています。小学生から高校生までの元気な子供たちに囲まれ、苦労は多いものの喜びはさらに多く、ふたりのライフワークにもなりつつあります。

毎年、夏休みを利用して高校生の信州合宿を行っており、今回で17回目を数えます。妻のふるさとでもある信州(上田市別所温泉)でこれを行うことは、自然に囲まれた涼しい環境に恵まれていることと、地の利もあり、地元高校にもお世話になり、交流も深まります。とりわけ妻の両親のもとへの里帰りも兼ねた、都合のいいものなのです。

しかし、今年は義父が病気になる、その看病をすべく、忙しさも倍になりました。年老いた義母は温泉街で長年雑貨商を営んでおりましたが、その状況を考え合わせ、閉店し落ち着く決心を急に決め、妻の奔走はさらにスピードを増しました。

合宿の中日の晩、その温泉街主催の「宿の日コンサート」に偶然出くわしました。それは温泉街を望む山の中腹にある神社で

われます。今年は、やはり地元信州出身のアコースティックギター奏者による音楽を、高校生と共に楽しみました。曲が夕暮れの境内に響き渡ります。都会的な曲に続き、信州人のこころ「ふるさと」を披露してくださいました。『いかにいます、ちち、はは...』私は病と闘っている義父を思い出し、そして長年生き甲斐としてきた小さな店を終える義母を思い、さらにそれに力を傾ける娘である妻を考え、押さえきれずに涙を流して聞き入りました。

中学校美術教師で画家の娘であった私の妻は、『志を胸に』上京し私と所帯を持ちました。そして今私は、妻の両親に、形はそれぞれですが「親孝行」に励んでいる、その歌の延長線上にいる彼女を知ったのです。母の店は改造され、父のギャラリーにするつもりです。展覧会以外はひとにその画を見せない奥手の父に代わり、彼女は多くの方々にあたたかい画風を紹介したかったに違いありません。

私たち夫婦は、信州と両親から何にも代え難い教えをいただきました。そしてそれを誇りに次の世代にその『こころざし』を伝えることが私たちの今のつとめと思い、子供たちに接しております。信州の大自然の包み込まれるような想い出と、私たちの感謝の願いを込めて、この信州合宿を終えました。



第20回信州合宿 夫神岳山頂にて 2006年